資　料

福澤諭吉の朝鮮論

教育学　金　　成和

本稿は日本が帝国主義国家へ浮上して行った時期に於ける対朝鮮政策の形成と展開過程を解明するため、さらに日本の侵略に抵抗した朝鮮の民族運動史研究を深化するために当時の日本人の朝鮮論を福澤諭吉の朝鮮論の分析を通して解明しようとしたものである。本稿は三章で構成されているが、一章は「亜細亜主義的朝鮮論：壬午・甲申政変期（1882年～1884年）」、二章は「脱亜論的朝鮮論：英国の巨文島占領事件期（1885年）」、までの時期を扱っている。本稿では主として『福澤諭吉全集』（全21巻、東京：岩波書店）を資料として利用したが、特に『全集』の中でも「時事新報論集」（8巻～16巻）を綿密に検討した。これは日清戦争期、福澤が最も関心を寄せていた朝鮮内の開化派と内政改革論との関連性に特に留意したからである。本稿を要約すると福澤の朝鮮論の変化は大体次の三つの時期に細分して説明が出来ると言える。

第一、壬午・甲申政変期（亜細亜主義的朝鮮論）である。福澤に於ける朝鮮に対する関心は1882年三月『時事新報』の創刊以来本格的に表われた。それ以前の彼の朝鮮論は朝鮮を停滞した社会として、日本との関係も無視してもいい国家として評価した。しかし、『時事新報』の創刊以来彼の朝鮮論は西欧の脅威を強調しながら日・清・朝の三国の協調と連帯を通して西欧の脅威を克服するといういわば「亜細亜（連帯）主義」の立場を標榜した。それは朝鮮に対する日本の積極保護及び朝鮮の開化支援論の形として表われており、このような彼の朝鮮開化支援論は朝鮮の壬午軍乱（1882年）以後朝鮮開化派との本格的な接触と、門下生の朝鮮派遣、朝鮮留学生の受容、開化派の日本借款導入への支援などの形に具体化された。この時期は福澤が直接・間接に初期朝鮮開化政策の思想形成に影響を及ぼしており、その最後の形態が甲申政変の関与として表われたものである。

第二は、いわば「脱亜論」が発表された時期の朝鮮論である。「脱亜論」に関する日本人研究者の研究の結果を分類して見ると、大体次の二つの立場で理解出来ると言えるだろう。即ち「脱亜論」前後をきっかけに日本の対外論の転換があり、その象徴として「脱亜論」を理解しようとする立場と、もう一つは一時的な状況認識の変化として把握する立場である。本稿では先ず今まで日本に於ける研究が福澤の対外論の分析対象時期を「脱亜論」に限定している傾向を指摘し、分析対象時期を彼の言論活動が継続していた全時期に拡大されるべきであることを指摘した。又、従来「脱亜論」の根拠として朝鮮内の親日開化勢力の消滅などが提示されて来たが、むしろ開化派の存在有無より朝鮮政変後朝鮮半島での日本の後退と清の対朝鮮従属論強化、英国の巨文島占領等朝鮮をめぐる新しい国際秩序の形成が「脱亜論」登場の主要因として把握した。

第三に、日清戦争前後の時期で、全体的に見れば日本政府の朝鮮に対する内政改革要求とその軌を共にすると言える。ただ、福澤の朝鮮論の核心は、改革主導勢力の交替、及び親日勢力の扶植にあり、又日本の同盟国の必要性を提唱したこと、そして、英国との同盟を提案しながら、同時に朝鮮半島に関しては一定の範囲内でロシアとの協調を提案したことである。一方、

朝鮮の内政改革に日本政府が続けて参与することを促した。特に日本人の移民と僧侶及び留学生の派遣を核心とした日朝両国人の直接交流と文化部分に対する支援策を強調した。

明治日本の対外問題の中心課題が朝鮮問題であり、福澤の対外論の核心もまた朝鮮問題であった。「脱亜論」登場という現象は、朝鮮に於いて西欧（ロシア）及び中国の脅威が増大し、日本の基盤は弱まり、従って西欧と協力して朝鮮に於ける日本の現状維持の必要が切実であった時表われたものであり、「亜細亜連帯論」の場合は、西欧との一定の妥協の下、亜細亜、朝鮮に於ける日本の勢力回復を追求していた時期に表われたものである。このような彼の朝鮮論の本質は、一貫して日本の膨脹主義を先導するものであったと思われる。

福澤が主張した明治日本の‘支援’と‘改造’を手段とする亜細亜各国の‘独立’と‘東洋の平和’は、当時亜細亜各国の指導者と国民達にどのように映り又受け入れられたかという問題はまた一つの残された課題になるであろう。

メディアとしての教育－教育のメディア論の探究

教育学　黒　川　　努

現代社会は、情報化社会あるいは脱工業化社会というよびかたが、よくされている。それは、たんに情報のハードウェアが進歩していることや、ソフトウェアの質・量が充実していること、あるいは産業におけるサーヴィス部門の比重の増加といったことではない。それは文化的な社会の変容という問題なのである。

このようなメディア・テクノロジーの進化と浸透は、社会のさまざまな活動に影響をあたえる。そしてそれは、学校をはじめとする教育にも、およんでいる。

いっぽう、近代以降発達したマスコミュニケーションにかんする研究は、「メディア論」として、その社会的作用にかんする対象化がすすんでいる。

メディアの浸透はあらゆるところにおよんでいる。教育もその例外ではない。だとすれば、そこにおいて「教育のメディア論」という問題設定が可能となる。しかしそれは、従来の教育研究のなかには、存在しなかった。

教育研究において「学校批判」は存在するものの、「教育批判」とでもいうべきものは、まだその地位を確立しているとはいいがたい。脱学校論は「学校」や「学校制度」あるいは「教育制度」にたいしての批判であって、制度的な改善 —— 勿論抜本的な —— がその要求である。つまりそれは、簡単にいえば「改良主義」というレッテルをはられかねないあやうさをもっている。

教育方法論の範疇では、教育方法の改善によって、あらゆる教育をめぐる問題を解決しうるかのような幻想がふりまかれている。

「教育批判」という立場が定着していない原因として〔教育の善性イデオロギー〕とでもいうべきものの存在が想定されうる。

教育批判の学として、教育を研究することを、

「メディア」という概念によって可能にはできないか。そうした問題意識から、「メディアとしての教育」というテーゼが、考案された。

現代社会とメディア、そして教育をめぐる問題意識を、序章では提示している。

第Ⅰ部は教育研究におけるメディア観の概観にあてられている。1章においては、教育とマスコミュニケーションを、「コミュニケーション」の性質から比較・検討することによって、教育のメディア性をあきらかにしている。

2章では、教育研究における、メディアという用語の取り扱い、その研究の文脈、概念化されたメディアという観点の有無などについての検討をおこなっている。

第2部は教育とメディア概念をいかに連結させるかについての考察が課題である。まず、W.オングの「メディア・モデル」への批判をふまえて、中野収の「汎メディア論」にちかい立場から〔環境としてのメディア〕というコミュニケーション理解を提出しているのが3章である。そして4章で、メディア論としてはあまり紹介されていないエンツェンスベルガーの『意識産業』の議論をふまえながら、教育制度をメディアとしてとらえる視点を提示し、終章において今後の課題として、教育の歴史の権力論における検討（フーコーの議論を参照として）、〔教育の善性イデオロギー〕の対象把握などが示されている。

この論考は「メディアとしての教育」という観点のための出発点であり、「教育のメディア論」のための基礎的な概念設定を、その中心課題とした。

「自己と他者の関係性」

教育学　本間　健太郎

人間関係を考える際、まず2人の人物を思い浮かべてみる。この時、この2人のうち一方が2人が親しいと云っても、もう一方が相手を全然知らないと云えば、その関係は「妄想」「空想」だと云われるかも知れない。けれども双方がお互いに認識していて、お互いに親しいと思っている関係においても、その関係が「空想」的ではないと本当に云い切れるであろうか。

人間間に関係が存在するとはどういうことだろうか。「二人以上の人間の間で、一方がもう一方を…として知覚して」とか「…という傾向がある」と云ったところで、その2者の内部で密かに起こっていることについては何も云ってくれない。それこそ「空想」であるかも知れない。そのためには何か目撃者が必要である。世界には、裸眼ではもちろん、虫眼鏡でも、光学顕微鏡でも見ることのできない現象も存在する。そのためには電子顕微鏡を通してみることが必要である。この論文では、人間の「存在」というものに根拠を見出し、人間関係を微視的に見る R.D.レインの「結ぼれ」を援用することにする。

具体的には、Ⅰで R.D.レインの未邦訳書である“INTERPERSONAL PERCEPTION”をざっと追っ

てレインの関係性の理論を概観し、投影に端を発し螺旋的に悪循環を起こしその関係の当事者である2人が相互に疎外されてゆくとレインがいう「結ぼれ」について述べる。

次のⅡではⅠで述べたことを、他のレインの著作と、現象学に基づいた人間の「存在」ということによって肉付けをして「結ぼれ」ということについての存在論的根拠を見つけ、また「結ぼれ」の中でも、相手の空想に基づいた見せ掛けである「にせ自己」を相互に承認するふりをすることで安定を求める「共謀」という関係性を挙げる。

そしてⅢでは新たに今度は日本人の関係性についてまず述べる。日本語の構造、さらに云えば社会の構造を反映しているため日本人はお互いがお互いの「汝」であるような関係性を持つと森有正が云う「二項関係」という概念を説明し、最終的に「共謀」と「二項関係」の存在論的な相似点をいくつか挙げて、これらの「にせの」関係性が人間の存在とどのような繋がりがあるのかを考察する。

平たく云ってしまえば、レインの「共謀」(「結ぼれ」)と、森の「二項関係」という2つの関係性と、人間の持つ「存在」との関わりとから、人間の「にせの」関係性を描くことが本論文によってねらうところである。

身体感覚の発達に関する研究

教育学 石 丸 素 史

我々にとって余りにも身近にある身体は、その近さの故に捉えがたい存在でもある。その身体の多様なさまを多様なままに捉えようと試みた。「我々の精神とは、身体そのものである」という命題が基になっている。言わば身体は物理的な側面を強調するかの様に我々の前に姿を見せるのであるが、その繊細さは身体像をめぐって繰り広げられる現象をみても明らかであろう。精神分析学派、自我心理学、それぞれの領域で、身体は魅力に溢れた研究対象になっていた。

特に身体のありさまと人格を関連づけようとする研究は飛躍的に進んだ。また最近では肥満症者などに見られる過食、神経性食欲不振症等、心と体が緊密に関連した、いやむしろこれまで一つだったはずのものが通い合わなくなっているからこそ、生活に困難をきたしているひとが少なくないことが諸家の研究結果をみてもうかがえる。筆者はこれらの困難な状況に見舞われてしまった人々のもっとも恐れているものは、空虚な、身体から遠ざかった世界だと考えている。

われわれの社会はあの手この手を使って我々から身体性を剝奪しようとしている。しかしわれわれは、断じてそれと闘うこともできるのである。人間の行動は、ある意味で常に活動性のあることを好ましいと思っていると云えないだろうか。

だからこそあるひとびとは常に身体を動かすことに熱中するのではないかと思う。

筆者は実際に身体を激しく訓練することを自らに課している人々が、自分の体をどの様に感じているのかを明らかにしようと試みた。結果は、身体を習慣的に動かしている人すなわち日々訓練を行っている人は、特に男性の場合は訓練をしていない人に比べて自己の身体的機能だけではなく、自己そのものを高く評価する傾向がある、ということである。それに対して、女性はとくに外観においてむしろ低い評価をすることすらある可能性が示唆された。こういった結果から、また一つ我々は考えを深めることができる。つまり、この結果を単純に解釈するならば、男性は社会的にも身体を鍛練すること、たくましい身体を持つことが奨励されているのに対して、女性の場合はそうとは限らないと云える。すなわち、文化の中には明らかに女性に対してある一定の役割を押しつけようとする向きがあるかも知れない、ということである。今の段階ではそういった文化的要請が身体を疎外するものなのかどうかはわからない。しかしわれわれがもしそのような判断を迫られたときもっとも素直に有意義な判断が下せるのは〔身体の感覚〕ではないかと思う。

ロールシャッハテストにおける創造性について

教育学　加　藤　基　至

ロールシャッハテストにおける創造性については、これまでM反応やΣCについて特に注目されてきた。さらに、自我心理学の立場では、前意識過程的精神エネルギーあるいは本能的欲求の表出を示す1次過程 (Primary Process: Pripro) 反応とそれらがより社会的・適応的に中和化 (neutrarization) された2次過程 (secondary process) 反応を中心に検討が進められてきた。すなわち、Holt の適応的退行の主張によれば、Pripro 反応が自我の関与によって社会的・適応的な内容となる場合、つまり中和化された Pripro (＝2次過程) 反応では、その数が、創造的生産の質 (quality of creative production) と関係するとしている。この Holt の仮説に対しては、支持するものもあるが、認めない研究 (Pine;Gray ; Dudek etc.) もいくつか現れている。そして Holt を認めない研究では、中和化されていない Pripro 反応の数 (＝1次過程反応数) のほうが創造的特性と積極的に関係しているという結果が報告されている。

本研究では、以上のことをふまえ、ロールシャッハテストと創造性との関係を再検討した。すなわちM反応やΣCを中心に、ロールシャッハテストによって現されたプロフィールと創造性との関連を調べ、また Holt 仮説についての確認も行った。Holt 仮説についての検証は Maslow による「自己実現の創造性」や Barron, Pineの意見を参考にした。Maslow は、その人格的特徴の一つに「自発的な表現力をもち、本能的欲求を抑圧から解放しそこでの1次過程を容認する」ことを、また Barron,

Pine は、「独創的な人はそうでない人に比べて本能的欲求を抑圧するよりは表出するタイプとして特徴づけられる」ことを挙げていることから、精神的に健康で高い創造性を有する者（H－C群）は、1次過程反応の数が創造性の低いとみなされる者（L－C群）より有意に高いのではないかと推定した。そこで、小此木による分類を参考に、口唇（Oral）反応を6つに分け、単に1次過程反応と2次過程反応として見るのではなくカテゴリーごとに調べることにした。さらにこの中で、より破壊的（destructive）な要素の強い反応を取り出し、創造性との関連を検討した。その結果、総反応数、M反応、FM反応、Fc＋cF、FC反応、Fc＋cF＋C、R＋%、P%、やAx、Br、Pn、eye反応および総 Oral 反応、Oral 反応のカテゴリー2・4、de反応が、P＜0.01 で有意差を示した。またP＜0.05ではF、ΣC、8・9．10／R%、Oral 反応のカテゴリー1などに有意差が出た。以上の結果は、従来からの Rorschach や Klopfer のM反応解釈仮説を裏づけ、また Holt 仮説については否定するものとなった。さらに創造の前段階としての破壊を適切な形（中和化？）で潜在的に持っていることが創造的人格と何らかの関係があることも示唆された。

「J．ラカンと精神分析」

教育学　丸山　明

本論文は Lacan. Jの三つの存在論的な次元－すなわち、想像的なものの次元（I'imaginaire）、象徴的なものの次元（lesymbolic）、そして現実的なものの次元（le réel）－の関連に焦点を当てながら、それら三つの次元を実質的に構成している分析的な諸概念を抽出、検討していくことを目的として記されたものである。それら三つの次元の構成要素を順に、像、言葉、そして存在として挙げつらって論じていくことも不可能ではなかったであろう。しかし、そこで直面するはずの最大の難点は、それら一つ一つの概念が、それぞれの次元で、しかも人間の成長過程の観点から見れば、ほぼ同時的な起源を持ちながら互いに密接に関連しあっている、ないしは互いに入り組み合いすぎるために、ほとんど混乱といっていいような状態の中へと混入されてしまっているという点であろう。丁度切れ目の少ない文章が、あまりに一度に多くのことを伝える使命を背負わされてしまったが故に、その言葉の分量とは裏腹に、伝えるべきことを伝えきれなくなってしまったような、そんな状態を考えれば、そこに於ける難点を理解することもできるであろう。

しかし、そういった説明は避けるべきである。なぜなら、諸概念間の差異を埋めてしまうことによって、私たちはそれについて語るという可能性をも奪い取られてしまうのであるから。実際、概念的な区別を省みず、それらを曖昧な状態のままに残しておくという態度は、その外見の悲壮とは裏腹に、自己を差異化しないための一つの手段であることすらあり得ることなのであるから。だから注意が必要である。自分が何

を恐れ、何を求めているのかを人は知らなくてはならないのだから。キェルケゴールはこう言っている。子供は恐るべきものの何たるかを知らない、－それを大人は知っていて恐ろしく思うのである、と。そこでいう大人がキリスト教徒であろうとなかろうとそんなことは大したことではない。そこで本当に重要なことは、そこに確かに恐るべきものがあるということ、そして間違いなく彼はそれを知っていたということなのである。

その恐れの特徴は、それが人間固有のものだということである。しかし、固有のものだと言ってみても、それで恐れを所有したことになりはしない。それは人間にとってあまりにも外側に位置するために、もしくはあまりにも内側に位置するために、そしてそれがあまりにも、まさに恐るべき程に魅惑的であるために、人間はそれを知ろうとはしないのである。そして、そういった恐るべき次元を、精神分析は性の中に見いだす。

精神分析に於ける禁じられた恐るべき次元、端的に言えば、Freud はそれを Das Ding と呼んでいる。Das Ding は禁じられた対象である。Lacan はそれをさらに発展させて、その対象を自己の失われた一部、対象 a として取り扱うようになっていく。そして、自分自身の失われた次元、それを自分に結び付けるように機能するものとは、すなわち欲動である。しかし、無意識の次元が生ずるためには、それと重なり合うようにして、表象の次元が精神内部へと書き込まれなければならないのである。

結局、そういったことの全ては、主体の起源から既に始まっていることなのである。そして、欲動と表象、またはそれらの幻想的（想像的）な関わり合い、それら三つの次元の相互的な関わり方を描きだすことが、冒頭でのべたように、本論文の第一目的である。そして、最終的には、精神分析の終了に関する、Lacan 的考察を展開することでこの論文は閉じられることになるであろう。